

# 世界で活躍する企業の 障害者雇用は、地域貢献も

—日亜化学工業株式会社—

職場  
ルポ

EMPLOYMENT REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



日亜化学工業株式会社

〒774-8601 徳島県阿南市上中町岡491  
TEL 0884-22-2311 FAX 0884-21-0148

主力の三本柱は  
世界のシェア三五%

徳島市街から南下して一時間弱。那賀川を渡ると、田園地帯に「日亜化学工業株式会社」の本社、工場群が見えてくる。発光ダイオード（LED）で、世界にその名を知られる「NICHIA」。創業の地、阿南市に本社を構え、ローカルでありながら、グローバルに活躍する企業である。

日亜化学工業は一九五六年、石灰岩を精製し、カルシウム塩類および鉄塩など高純度医薬品原料の生産を始めた。ちなみに喉の薬、龍角散にもその炭酸カルシウムが使われた。一〇年後、蛍光灯用蛍光体の製造を、次いでテレビのブラウン管用および液晶テレビのバックライト用蛍光体など各種蛍光体の生産を開始。九

三年には青色LED、次いで白色LEDを開発して飛躍的に発展し、さらに電池材料などを生産している。

主力の蛍光体・LED・電池材料の三本柱のシェアは世界の三〇〜三五%。「日本」ではなく、「世界」というところがすごい。携帯電話の液晶バックライトは、二〇〇四年には全世界のシェアの九〇%を占めたという。北京オリンピックにも登場する大型LEDディスプレイ、そのほか蛍光灯、テレビ、X線感光紙、信号機、カーオーディオパネル、携帯電話やデジタルカメラ、車のヘッドランプなど、私たちの身の回りには「NICHIA」の技術を活用した製品があふれている。

本社の玄関・ロビーには、LEDディスプレイの巨大画面が「日亜百景」を映し出す。色がひととき鮮やかだ。従業員は約五〇〇〇名。世界最先端技術の開発・製造を行っている研究棟・工場の中は、すべて「企業秘密」。セキュリティは厳重で、外部の者は当然、社内でも入れる人たちが決まっているようだ。

「適材適所」で、  
一緒に働くが基本

毎年数百人の雇用を続けている「世界の企業」は、障害者雇用に関しても、余裕と独特の考え方をもち。この三月まで

人事部長を務めていた、常務取締役管理部長の岩浅肇夫さんに思いをうかがった。「入社してから障害者になった人もいますが、昔から障害者と健常者を分けて採用していませんでした。私も製造現場にいたときは障害者の方と何の違和感もなく、一緒に仕事をしていました。社員が増えてきたころから、性根を入れて障害者雇用をしなければと考えるようになったと思います」

岩浅さんは生産の第一線で活躍し、五年前に人事部長に就いた。「社員の九割は徳島県南の人たちですから、お父さんが知り合いだったり、友だちだったり、親戚だったり、ご近所だったり何らかのつながりのある人がいます。県外の人は技術者の人たちぐらいです。町には、昔から障害者の人も戦争で負傷した人もいました。私もその人たちと接した体験をもっています。田舎の人間は、周りの人と一緒にすることが普通ですから、社風は温かです。家族的だと思いますね」

障害者は、製造、品質管理、事務などの生産現場で仕事をしている。

「適材適所が大事だと思います。それは健常者も障害者も一緒です。耳が不自由なら、耳が不自由でもできる仕事に就く。いちばん適した仕事ができればいい。基本は、健常者と一緒に働けること。事務や製造の現場で、お互いが助け合いな



岩浅肇夫常務取締役管理部長

がら働けることが理想です」

最近、障害者の人たちを対象に定期的な会合を始めた。

「配慮はいろいろしているつもりですが、人権問題にも詳しい私の恩師を講師に招き、心配なこと、体調のことなど、何でも言いたいことを言える場をつくりたいと、仕事を離れて『雑談会』を始めました。生産現場では理解度が上がって、障害者を自然に受け入れるようになってきたと思います。働くということは楽しいことばかりではありませんが、障害者の人たちが健康で長く働いてくれればと思っています」

日亜化学工業の各工場では、身体障害者三名、内部障害六名、知的障害五名、精神障害二名の四六名が働いている。

## 一生懸命な親たちを 応援したい

障害者のうちの五名は、出向社員として「社外」で働く。パン製造の「光のまちづくり協議会」と阿南商工会議所の「光のまちづくり協議会」に出向しているのだ。ということは、身分は日亜化学工業の従業員。そこに「独特」の考え方があふれている。そこに「障害者雇用には一家言あり」という常務の岩浅さんのお話で。

「パン屋は、障害の子どもを持つ社員



森義章人事課長

の奥さんが始めました。一生懸命な親がいて、子どもと一緒に働き、友だちも一緒に働くことができ、仕事も発展していくなら、その事業を支援しようと考えました。大変なのはパンを売ることですから、作ったパンを弊社で売ってもらい、給料は払うことにしました」

そうすれば、従業員は焼きたてのパンを食べられ、パン屋はパンが売れる。「双方がいいでしょ。知的障害の人たちには働きがいがあるはずですよ。家族と一緒に働いて、一人前に成長していつかくれたら、うれしいですね。会社のメリット？ 従業員がおいしいパンを食べられることでしょうかね」

もう一つの「光のまちづくり事業」は、地元企業として、阿南市、阿南商工会議所と協力している。阿南市のホームページには、「人、まちを さらめかせ、輝かす LEDが生まれたまち 阿南市は

光のまちづくりに取り組んでいます」とある。

「こちらは、阿南商工会議所と一体となって行っています。LEDでつくったオブジェを貸し出し、戻ってきたものをメンテナンスしていますが、障害者の親ががんばっているのを、支援したいと考えました。メンテナンスは障害者にできる仕事ですから、障害者にも幸せな話ではないかと思えます。障害者を雇用することは、地域への貢献にもなると思います」

## 厚生棟の清掃と 緑地整備で

人事課長の森義章さんは長年、採用・人事を担当し、障害者の雇用にも携わってきた。

「身体の障害部位によって、できる仕事は違います。知的障害の人も、個人個人の特徴が違い、おのずとできる仕事は違います。障害者の雇用に関しては、一つに当てはめないほうがいいと思います。最初にジョブコーチ支援をお願いします。何ができるかを考えますが、その後は特別なことはしていません。もしできなかったら、部署を変えます。気持ちよく働いてくれたらいいですね」

森さんの案内で、まず本社棟に隣接する厚生棟へ。壁面がガラス張りの食堂に、LEDの照明が下がる。このしゃれた建





厚生棟の清掃をする薦田（こもだ）勇人さん（左）と小島裕一さん（右）



指導員の指示を受けて作業を始める

阿南商工会議所にある「阿南光のまちづくり協議会」では、全国各地からLEDオブジェの貸し出しの注文を受ける。マンドラドーム、光のトンネル、ピラミッドなどのさまざまな形のオブジェ

「LEDの三角のオブジェを一六〇枚組み合わせると、光のドームになります。LEDにすると、電気代もかかりません。音とのコラボレーションは、各地のイベントで好評だと聞いています」

「光のまちづくり事業」では、LEDのイルミネーションで、まちを彩る。

## 「光のまちづくり」に協力。パン屋を支援

続いて、出向者が働く現場を訪ねた。

ル祭りも開かれる。花壇の植え替えには、地元養護学校からの実習生も受け入れている。裏山も敷地で、夜にはLEDが灯る。広々とした、うらやましい環境だ。ちよūdō草木が伸びる時期、二人が芝生の雑草をていねいに抜いていた。「作業には慣れました。むずかしくはないです」



工場内の緑地整備で汗を流す井筒慎也さん（上）と角地輝（すみじあきら）さん（下）

物は、昨年完成した。  
この厚生棟の清掃や緑地整備で、聴覚障害者一名と知的障害者三名が働いている。清掃を終えた人たちは「働きやすい会社です」と。一緒に働くのは六〇歳定年後の継続雇用の人たちで、障害者の父親のような存在になっている。  
敷地内には「歩危公園」があり、季節の花々が咲く。池の間をせせらぎが流れ、すぐそばの岡川には野鳥が飛来する。近くの保育所からは遠足にくるとか。家族を招いてホタ

# 職場 ルポ



「光のまちづくり事業」で使用するLEDのオブジェを点検修理する  
大山貴博さん(左)と島崎尚幸さん(右)



指導にあたる大山寛永さん(写真左)

は、徳島県内をはじめ、東京ドームシテイ、大阪、ドイツなどの海外、各地のイベントで展示されている。

阿南駅近くの作業場で、二名の障害者が貸し出し後のメンテナンスを行っている。大山貴博さんと島崎尚幸さん。大山さんの父親、寛永さんが指導役だ。スイッチを入れてもらうと、LEDが輝いた。「屋外に設置されますので、雨風にさらされます。戻ってきたものは一つ一つ点検して、補修をしています」

次に手作りパンの「こんがり宅急便」のお店へ。二〇〇五年一月、J R 牟岐線羽ノ浦駅前にオープンした。社員の息子の阪野翔生さんがダウン症で、母親の恵子さんがわが子と一緒にパン屋をしたいとの思いで、パン作りを修業した。設備投資や経営は自分たちで行い、お昼に日亜化学工業の食堂にパンを売りに行く。

緑のキャップ姿で働く出向社員

は、一名から三名に増えた。みんなのお勧めは、クリームパン。「ふわふわで、おいしいです」

よく売れるのはクリームパンやメロンパンで、モチモチケーキもお勧め。自分たちでレジも打ち、接客をする。勤務は午前八時から午後五時まで。

「最初は疲れましたが、いまは大丈夫です」

全員、きびきびと働いている。出向者には最賃以上の時給で給料が支払われる。

## 特別扱いはしないが 配慮はする

昨年は五五〇名、今年も六月までに中途採用も含めて四〇〇名と従業員は急増中で、障害者



鳥井勝浩人事部長

の雇用がなかなか追いつかない。

「退職と採用が見合っている企業では障害者雇用率を維持していけると思いますが、退職者は少なく、新規雇用が大きい企業の障害者雇用計画は厳しいものがあります。九月の障害者の合同面接会には必ず参加していますが、追いつくのはたいへんです」と担当の森さん。

「体調を崩して長期休暇をとった人はいましたが、復帰していますし、辞めるという人はいませんね。採用のとき、障害者に『特別扱いはしないけれど、配慮はします。個人個人違うので、不便なところは言ってきたください』と話します。阿南市の辰巳工場に重度のリウマチの女性が入社したときは、妊婦の人もいましたので、大至急で和式トイレを洋式に変えました」

「特別扱いはしないが、配慮はする」の一例。聴覚障害者から「ドアのノブが



## WORKSHOP REPORT

丸いと動いてもわかりにくい、人が入ってくる動きがわかるように変えて欲しい」という声が出たときは、すぐにレバー型のノブに変えた。

鳥井勝浩さんは今年四月、システム部門から人事部長に就任した。

「障害者だからと、特に区別するつもりはありません。働くことができる方がきていただける体制をとっていきたいと思います。足の悪い方には階段をスロープに変えたり、手すりをつくったり、ハード的な対策をしました。これからもしていきたいと思っています」

「いい人がいたら採用していきたい」と常務の岩浅さん。四国の一地域で、世界を相手に活躍する企業のお話を聞いていると、こちらもうれしくなってくる。

「私自身がうれしい。ラッキーなんですよ。現場をきれいにしたら、事故が少なくなるのと同じで、会社をきれいにしたら、会社は伸びてくるはずですよ。会社があちこちさびだらけ、ゴミがいっぱいでは、働く者の心までさびついてきます。従業員の平均年齢は三〇歳ちょっと。泣きたくてもニコニコして、会社の将来に向けてがんばってもらいたいと思っています」

世界のシェア三五%の最先端企業は、グローバルでいてローカル。地域に密着し、地域に貢献する。余裕がある企業だからできる障害者雇用の一例だと感じた。



手作りパンの「こんがり宅急便」の皆さん



豆パンづくりをする大本道広さん



トライアスロンの選手としても活躍する  
阪野翔生（しょうき）さん



メン棒を使ってパンづくりをする近藤慎也さん